

◆「社会学」の居場所

(後付けであることを承知で)社会学と自分の「出会い」を述べようとする、小学校低学年の頃に抱いていたある悩みを思い出す。その「悩み」というのは、子ども雑誌の懸賞のどれにマルを付けて応募するか、である。この雑誌を買うことは2年生くらいまでで止められてしまった記憶があるので(代わりに親は学研の『学習』『科学』を買い与え始めた)、やはり低学年の頃だったと思う。雑誌には必ず葉書が挟んであって、面白かった記事と感想を書き込んで切手を貼って投函するようになっていた。人気記事の読者調査の動機づけにおもちゃの景品が掲げられていたわけである。

一番欲しく思えたおもちゃには「1めい」と書いてあった。一方、貰っても貰わなくてもどちらでも良いものには「100めい」と書いてあった。いったい何人くらいがその懸賞に応募しているのかはよく分からなかったが、「1めい」はとても当たらなさそうだったし、「100めい」のおもちゃは正直欲しくなかった。そして不思議なことに、欲しくないおもちゃほど「〇めい」の数は多くなっていた。どうせ当たらないのであれば、「100めい」のおもちゃにマルをするべきか。あるいは「3めい」とか「5めい」とかにしておこうか……。

ただ、そこで考えたのは、「1めい」についてそう考える人が多ければ、「1めい」のおもちゃに応募してくる人は意外と少ないのではないか、あるいは逆にほとんどいないのではないかということだった。これはそれなりに発見だった。そうか、ではやはり思い切って「1めい」のおもちゃにマルを付けよう、と彼は考える。

けれども当然、すぐに悩みはぶりかえした。そう考える人もやはりいるだろうから、その人も同じ「発見」をすれば「1めい」にマルを付けるだろう。そうすると、何も考えずに「1めい」にマルを付ける人と合わせて、結局それなりの数になってしまうのではないか。しかし、さらに悩ましいのは、これまたそう考え、諦めてしまう人も結構いる可能性であり、そう考えるとやはり「1めい」にマルをしてもよいように思えるのだった。

いま思えば、この子どもは、社会学でいう「予期の予期」(他人のしている推測を推測すること)を何らかのかたちで試みようとしていた。ただ気の毒なのは、彼が何らかの「発見」に至ったとき、他の人も同じ選択をするのではないか、そのことで「発見」の前提が変わってしまうのではないか、ということにすぐに思い至ってしまい、自縄自縛に陥ってしまうことだった。もちろんそれは無理もないことだったが、そうした自縄自縛を引き起こす人々の「考えること」の幅や分布、構造全体にまでは思いをめぐらすことはできなかった。

それを超えるためには、何らかの「社会調査」をするしかなかったはずである。つまり、人々の予期の予期(の予期の……)を考えて思い悩むのではなく、じっさいに周りの友達に「どれにマルする？」と聞いて回り、端的にどう行動するかの分布を調べればよかった。それができなかったのであれば、やはりまだ彼は社会学と出合っていなかったのかもしれない。

ない。

ただ自慢では無いが（結構自慢だが）、この方式で 2002 年の日韓ワールドカップの日本戦の特別観戦チケットを懸賞で当てたことがあった。日本代表チームがグループリーグを 1 位で通過し、ほかのグループを 2 位で通過したトルコと対戦し、負けたあの試合である。あの懸賞は何倍くらいだったのだろうか。日本の 2 位通過を予想した決勝トーナメントの試合のほうには、相当な応募数があったはずである。もちろん自分でも、日本代表チームがグループリーグを 1 位で通過するとはあまり思っていなかったけれども、大部分の人が予想していた 2 位通過のチケットに応募して当たる確率の低さと、日本代表チームが 1 位通過する確率の低さを天秤にかけ、総合的に判断したのだった（自慢である）。

つねに「予期の予期」に思いをめぐらせるような子どもだった自分が高校生のときに手にとった初めての「社会学」の入門書は、放送大学の教材だった。井上俊と大村英昭の共著で、タイトルはシンプルに『社会学』。現在では『改訂版・社会学入門』として手に入る。この本は、社会学の入門書として薦めたい名著である。

各章それぞれに発見があり、社会学という学問の魅力を十分伝えてくれるのだが、やはり一番面白かったのは「予言の自己成就」が紹介されている部分だった。現状や未来に関してある見解が示されると、それによって人々の行動が変わり、その見解が結果的に現実化してしまうというものである。おもちゃやワールドカップの観戦券の抽選にもあったように、いくつかの思惑や見解が組み合わさり、複雑に作用して思いもよらぬ結果を作り出すのが、近代以降の社会の姿である。

ここで「予言の自己成就」に関わる「見解」というのは、現実の状況に照らして正しいか正しくないかということ判断されるのではなく、人々の行動の変化を促しやすい「もっともらしさ」を持っているかどうかということがポイントとなる。極端な話、たとえそれが全くの嘘であっても、嘘を信じた人々が大挙して動き、嘘を現実化してしまうことがある。「予言の自己成就」は、そうした逆説を指摘する社会学の「面白さ」のポイントの一つのように思えた。

同じ頃に歴史（近代日本史）の授業で学んでいた銀行の取り付け騒ぎとこの「予言の自己成就」はすぐに結びついた。1927 年の議会での大蔵大臣の失言が取り付け騒ぎを起し、昭和恐慌の引き金になった事件である。現実にはその銀行に破綻の可能性は無かった。けれどもその失言を信じ、預金者が預金を一斉に下ろそうとすれば、利息を得るために既にその大部分をほかに貸してしまっている銀行は破綻することになる。

ただ、ここにはもう一つポイントがある。それは、もしその銀行が破綻しないという何らかの事実（真実）を知っている預金者がいたとしても、ほかの大部分の人がそのことを知らずに大挙して銀行に向かえば、やはり銀行はつぶれてしまうことが予想されるので、彼もまた自分の預金を守るために、銀行に向かわなければならないということだ。結局彼も、取り付け騒ぎに加わるのである。

そしてやや極端な仮定をしてしまえば、預金者の全員がその銀行は破綻しないことを知

っていても、その人たちが「ほかの人たちは破綻すると思って取り付けに向かっている」
と思ってしまえば、やはり同じく取り付けに向かい、銀行を潰してしまうということだ。

もちろん、このように極端なことはなかなか起こらない。それでも、ひとたび何らかの
悪循環が始まってしまえば、たとえ事実が伝えられようとしていても、「だからこそあやし
い」という解釈でコミュニケーションが妨害・歪曲されることになる。

似たものを探すと（これも社会学の入門講義や高校への出前講義などでよく使うネタな
のだが）「紙幣」だろうか。よく見れば（よく見なくても）あれはただの紙である。ここで
紙幣の価値の根拠となっているのは、紙じたいではなくて、紙に価値があると考えている
私たちの社会の「信用」のほうで、これほど曖昧なものはない。つまり「信用」の度合い
は状況により変化するので、紙幣の表す価値自体も変動する。インフレとデフレがある
ということだ。先のポイントの部分を繰り返せば、「紙に価値があるなんて自分は信じていな
いけれども、ほかの皆は信じている」（と信じている）という想定を社会で共有すること、
これがその根拠となっている。

話を戻そう。ここで、事実を知っている／知っていないというのは、それだけでは大多
数の人々の「見解」あるいは正確には「見解についての見解」が作り上げる現象のまえに
無意味となる場合がある。この取り付け騒ぎのように、人々の思念が「現実」を作り上げ
てしまう場合だ（だからこそ、例えば歴史学者や社会学者をはじめ、学者というのは少々
「浮世離れ」していることが必要となる。社会の安全弁として「少数者」であることが求
められているわけだ）。

逆に言えば、「取り付けに行く」という行動の外形が同じでも、その根拠として持っている
状況認識は全く異なる場合があるということだ。こちらのほうは外側からは見えない。
社会学は、外側からは見えない内面的な動機や、動機を成り立たせている状況認識と、実
際に選択された行為の外形との関連を考えようとする。

たんに予言が自己成就してしまうという逆説的な現象の存在を指摘するだけが目的なの
ではない。ある集団的な現象が見られたとき、どのような動機や推測の組み合わせや分布
がそうしたことを成り立たせているのか、それを多角的に理解しようとする。それが社会
学なのである。

◆神話は「解体」するものではなく「理解」するもの

現在流通している過去についての「嘘」を暴き「真実」をしめすことは、歴史学の得意
とするところで、そこでは歴史社会学もまた同様の貢献することがあるだろう。一方、歴
史に関連して社会学にしかできないことを挙げれば、「嘘（のように思えるもの）」が現実
を構成することもあるということ認め、その子細を検討することである。

そのために求められるのが、ある程度嘘に「つきあう」という態度であろう。「〇〇神話
の起源」とか「〇〇神話の解体」といった書物がひととき流行ったし、今でもそういうス

ダンスで歴史が語られることがあるけれども、読んでみれば（全部ではなくても）、「正しい知識」をそれにぶつけ、誤った知識が流通する現状を批判したり嘆いたりすることが殆どのように見える。

それだけではないのではないか。過去を語る形式の一つである神話にまともに向き合えば、その神話の真偽だけでなく、そうした神話が流通し、人々のあいだで「もっともらしさ」を獲得してしまう理由、それがつくり出してしまう現実のほうが気になってしまうはずである。むしろ簡単に解体することは難しいから「神話」なのである。